

夏合宿 — 四十符四班 — 1年 三浦克永  
— プロローグ —

ぼくが、高校の時の友達に、夏休みは北海道へ行ってきたと申しすと、みんながうらやましそうな目でぼくを見るのです。「北海道とは、ゴーセイなクラブだあ。」などいって、でもそんなにコチーサニネエクラブではないのであります。<sup>(註)</sup>やはり合宿ですから、さかしさ、うらさはあります。自転車なんかホッポッといて、帰りたいと思ったことしばしばです。しかし、今、思うと「たのしかた」の一章に尽きるということになるでしょう。

北海道という所は、夏でもサバイと思っていたのでありますが、釧路に着いたところ、アッタイのなんの、て、まだ朝の9時ごろだというのに汗がタラー。それではコワイお話をかきとー。ぼくと名取が駅前でフンガホを雇って読んでおると、一見「平尾昌晃」風、身なりはまあきちんとしたお兄さんが名取の目の前に座わりこんで、フンガホのそきこんでいるのです。

朝っぱらから一杯ひかかけているらしく、フラフラして口をもごもごさせているのですが、名取はホウシロをさしかじまをして、この重大な事態に気がついていないとは。ぼくの心中はヤバイ、ヤバイなのであります。さて、そのお兄さんは、ロレツのまわろない口調で、「これから私が、xxxxやるから見ててくれ。」とかなんとかぬかし、腹まさの中からまな板

みたいなモノを前に置きました。そその時に、ほくは腹まきの中にあるドスがザラリと鈍く光るのを見のがしはしなかつたのです。ま、まさかと思つた。そのドスを次にゆくりととり出したので、ほくらの顔はマッサオ、ただホーセンと見つめるだけ。ほくはそのお兄さんがこれから指をつめると直感し、こりゃマッポさんたちを呼ばなくては、と本気に考えたのでありますが、へビににらまれたカエルとはこのこと、そのお兄さんから視線をそらすことかできないのです。(ポンチ! はやくこいウルトラマン) ところが……それはほくの早とちりというやつで、そのお兄さんはまな板みたいなモノをパカと開き、中から一万円札の金メッキの原板のようなやつを出して、そのドスとアプローチを添え、「これ全部で、1500円でたのむ。」などと、スッとほけたことをいい出したのであります。その酔っぱらいのヤーサンはなりなりのスゴミがあまり、再びこりゃやバイの心境のなのであります。が……ほくら数人がひとこともしやばらないうちに「そうか」なんてつぶやいて、フラフラの4ドリ足で、アッカリ去ってしまったのです。すると山口さんが「あれ全部で1500円はゼツタイに安いね。」と一言、リキのない釧路のヤーサンの話でした。

こんなことが初日にあって、この合宿はどんなふうになんのかなあーと興味と不安を共にして出走したのであります。暑い中、走りに走つた旅でした。最初の頃キャンプは楽し

がたのですが、だんだんメンブークサクなってくるのが人情ってもんでしょう。そんなほくを支えてくれたのは食事のりっくさと楽しさでした。キャンプの上しあしは食事で決まると言えるでしょう。その点ほくら四十特四班の合宿は成功でした。特に最後のサロベツでの夕食はジンギスカン。これは7人でマトン3Kgという驚異的な量。しかもギリンゼールのロングかん付き。もう肉は見るのもイヤダというくらい食べて、それでもあまりがけました。この食事を最後にほくらの旅は幕を閉じたのであります。

(おわび:「合宿における2年生の行動とその真理分析について」というレポートを報告しようと思いましたが、たるいのでやんぴにしました。)

⑨ コチエサンネエ → 佐久地方の代表的方言

⑩ “こたえられない”がなまたものと思われる。つ判「たまらない」「満足だ」の意。本文では「軟弱で居ごこちがよい」の意。

⑪ 寝る時どこてえさんねえことはねえや、  
(寝た時など)寝ることほど集むことはないね)

以上

